



# 日常外の 世界



川崎ゆきお

昨日と同じような今日が来る。これが一番安定しているように思えるのは、安定を望んでいるためだろう。毎日毎日同じような日々では変化がなく、飽きることがある。違った展開を望む人も多だろう。ただ、それにはいつもの安定した日々があったのこともかもしれない。連日連夜波瀾万丈では体も持たないだろう。それらは短期で終わり、またいつもの日常に戻る。しかし、波瀾万丈をやり過ぎて、次の日はもう別の日常になっているかもしれないが。

徳田は年取ってきたので、昨日と同じような今日の方を好んでいるが、必ずしもそうではない。別に退屈はしていないが、少しだけ刺激が欲しい。これは人生が変わるほどのことではなく、元に戻せたり、また昨日よりは少し良い状態が続くようなバージョンアップ程度だ。決して革新的なことではない。

ただそういうことも贅沢な話なのかもしれないが。

「変化ねえ、ありますよ。最近連続テレビドラマをまとめて見ているのですが、変化を十分堪能出来ますよ。しばらくは登場人物の誰かになったような気になりましてねえ。その人と日々生きているようなものですよ。まあ、ドラマですからねえ。最後はいいようになるんです。大成功を収めてね。それまでは結構苦しいです。見ていて苦痛です。しかし、その苦痛をしばらく我慢しておけば、その後、展開がよくなるので、そこでカタルシスを味わうわけですよ。これが最初から最後までスラスラと行けば、カタルシスもない。まあ、スラスラ行く方が良いでしょう。何も抵抗感がなくてね。しかし、変化があったほうが楽しい。しかし、あまり苦しい展開になると、引いてしまうことがあります」

「それはフィクションでしょ」

「はい、筋書きのあるドラマです。実は結果は知っているのです。ハッピーエンドで終わります。だから安心して見てられるのです」

「やはり、リアルの現実上での出来事でないと」

「気分だけは波瀾万丈、しかし、画面を消すといつもの私に戻っている。これって安全でしょ」

「僕は、散歩などに出て、町の変化などを楽しんでいます」

「また地味な。大きなドラマはないでしょ」

「はあ」

「現実では叶えられないことはフィクション、バーチャルで済ませるのも方法ですよ」

「しらけませんか」

「はい、感情移入は得意なので、作り物なのだけど、そうは思えなくなるのです。真剣に見てますからね」

「良い性格ですねえ」

「はい、おかげさんで」

「確かに人には夢が必要です」

「夢のまま終わることが多いでしょ」

「あ、はい。最近はだから、大きな夢は見なくなりましたが」

「これはねえ、一種のガス抜きなんです」

「あ、はい」

「昔は、祭りなんかがそうだったんじゃないですかね。あれはフィクションに近い話ですよ。それに非日常の世界だ。つまり、非日常な世界が必要だったのですなあ」

「今もですか」

「たまには、とんでもないことに遭遇したいものですよ。しかし、悪いことでの、とんでもないことはあっても、良いことでは少ないですからねえ」

「僕は非日常かどうかは分かりませんが歴史を調べたりしています。昔の暮らしとか、昔あった戦いとか」

「なるほど、それも今の現実とは一寸違うので、別世界を彷徨う感じですかねえ」

「そうです」

「まあ、日常が退屈で変化がないと、そっちへ行くのでしょうかなあ」

「はい」

「だからって、現実は動かない。そうでしょ。人の話で、私の話じゃない。私はそのままだ。それが少し物足りないのですがね」

「しかし楽しみ方の一つとしていいんじゃないですか」

「そうですなあ。そういう楽しみが出来る状態だけでも十分かもしれません」

「久しぶりにお会いして、まだ元気そうなので、安心しました」

「ぼんやり時を過ごしていても、どんどん過ぎ去っていきますなあ」

「じゃ、今日はこれぐらいで」

「はい、ドラマの続きに戻ります」

「はい、お元気で」

了